（今村 弥生）論文内容の要旨

主　論　文

論文タイトル　**Associations between daily lifestyle characteristics and latent depressive symptoms in elementary school children: A cross-sectional survey**
長崎県佐世保市における子どもの生活習慣と抑うつ症状

今村弥生　本田純久　高江洲義和　苅田香苗　菊地俊暁　渡邊衡一郎
小澤寛樹
Acta Medica Nagasakiensia 64巻　53-59頁　2020年

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻
（主任指導教員： 小澤 寛樹教授）

緒　　言

子どものうつ病は、不登校やいじめなど、子ども自身の成長や、他の子どもにも影響も及ぼすため、早期発見が重要となる。先行研究により、若年者のうつと関連する因子はすでに複数同定されているが、小学生についての検討は少ない。よって今回、我々は学校教諭や地域の支援者など、子どもに接している精神医療の非専門家でも認識できる子どものうつ症状の指標検索を目的に、学校に通学中の小学生のうつ兆候と生活習慣との関連を調査した。

対象と方法

2011 年に実施された、長崎県佐世保市内の小学校に通学中する 10-12 歳の小学生 1961 人を対象とする無記名アンケート調査の再解析を行った。アンケートには日本語版バールソン子供うつ病尺度 Self-Rating Depression Scale of Birlson (DSRSC)が含まれており、この尺度の 16 点以上をカットオフ値として、子どものうつ兆候の有無を評価した。統計解析には連続変数の 2 群間の比較には t 検定を、名義変数の比率の比較にはカイ二乗検定を用い、さらに多変量解析にはロジスティック分析（ステップワイズ法）による多変量解析を行った。統計学的有意水準は 5%とした。

本研究は長崎大学医歯薬学総合研究科の倫理委員会の承認を得て行った。

結　　果

2055 名に配布したアンケートのうち、1961 件（95.4%）の有効回答を得た。うつ兆候を有する割合は 24.7%で、統計学的に有意に子どものうつ兆候があることと関連があった項目は、入眠時間が 23 時以降、朝食を食べない、夕食時間が決まっていな

いことで、低い子どものうつ兆候と関連があったのは、運動系の部活に入っていること、家で１時間以上勉強することであった。

起床時間、家での勉強時間、学習塾に通っていること、インターネットやゲームをする習慣、友達と電話で話す習慣は、うつ兆候と有意な関係はみられなかった。

考　　察

学校に登校している子どもの潜在的なうつ兆候と、いくつかの生活習慣との関連について報告した。今回の結果から、社会と接触の機会と、親の生活習慣が子どものうつ兆候と関連があると考えられた。よって、子どもだけではなく、親の生活習慣についても評価することが、子どものうつ兆候を把握することに役立つと考えられる。子どもの生活習慣は精神医療の非専門家でも観察できため、統計学的に意義のあるものに特に注意して、大人が関わることで、未病の段階における子どものうつの予防に役立つと考えられる。　本研究の限界として、横断研究ゆえに因果関係についての考察できないこと、子どもへの自記式のアンケートの調査なので、うつ兆候の評価は専門家の面接によるものより正確性が劣ること、今回の調査は佐世保市のみの調査ゆえに、日本に住む子ども全体の調査結果とは言えないこと、家族の経済状況、学校の成績、ω脂肪酸の摂取量や自閉スペクトラム症・ADHD の合併の有無などの子どものうつに関与する指標が検討されていない点が挙げられる。